

第2巻における「本席・家族」に関する伺いと「道」

今回は、『おさしづ改修版』第2巻(明治24～25年)の「本席・家族」に関する「おさしづ」における「道」の用例を整理する。第2巻には「本席・家族」に関する「おさしづ」は46件あり、そのうち「道」が用いられるのは30件、3回以上用いられているのは20件である。ここでは、「道」の用例に注目するため、3回以上「道」が用いられている20件の「おさしづ」を取りあげる。その中身は、「飯降さと身上願」(明治24年12月1日)「本席住宅普請の願」(明治25年10月15日)以外はすべて本席の身上伺いである。本席身上伺いの「おさしづ」は刻限の「おさしづ」と同様の意味合いを持つと言われる。刻限では、「さしづ通りの道」(明治24年2月7日)ということが言われているが、本席身上伺いの「おさしづ」においても、刻限の「さしづ」をしつかり聞き分けるよう繰り返し強調されている。その文脈で、「道」という言葉は、「さしづ」を聞き分けて進む方向と、その際に心に治めるべき事柄を指して用いられている。

「二つの道がある」

人間の進む方向を「道」という言葉で言われるが、「道幾重道もある。あちらへずらり、こちらへずらりへ」(明治25年4月28日)とあるように、それは実に様々な形がある。しかし、「おさしづ」では、「道」は二つあると言われる。それは、当時の天理教会のあり方に対する「おさしづ」であると思われる。

「日々の事情始まった道、今一時世上世界の道理上の道、二つの道がある。元々運ぶ道大勢の中、何名々々言い掛けるへ。話が変わる。さしづより外に理は無きもの。……人間というは、その日への道しか無い。神が付けた道はころっと変わった道。……これまで成り来たる道は神の道、どんな事するも第一やしきの道、ぢば一つの道、……勝手というはどうもならん。勝手というは、人間心の道であるから一寸にはよい。なれどいつへまでも治まらん。」(明治24年5月8日)

「今の処は二つある。一つの道は表の道、一つの道は心の道や。表の道一寸の道や。心の道は違わしてどんならん。……胸の道あればこそ、これまで通り出来てある。……世界道というものは、とんと頼りにならん。しっかりしたようで、ふわへしてある。世界の道に力を入れると胸の道を薄くなる。ほんの分からぬ世界の道に力を入れては何もならん。……胸の道は神の道やで。……これ胸の道が第一やで。しっかり聞いて置かねばならん。大事の刻限の道やで。」(明治24年5月16日)

二つある「道」のうち、一方は、「その日への道」「人間心の道」「表の道」「世界の道」などと表現され、もう一方は、「神が付けた道」「これまで成り来たる道」「神の道」「やしきの道」「ぢば一つの道」「心の道」「胸の道」「刻限の道」などと表現される。そして、前者の「道」は「一寸にはよい」が「いつへまでも治まらん」あるいは、「とんと頼りにならん」と言われ、後者の「道」によってこれまでの本教の歩みが成り立っていることを論じられている。ここで、この二つの「道」についての論は、「さしづより外に理は無きもの」あるいは「大事の刻限の道」という言葉にみられるように、神の「さしづ」を聞き分けるという

ことを基準に展開されている。すなわち、前者の「道」は神の「さしづ」を聞かず、あるいは聞いても聞き流して人間の「勝手」で歩みを進めることであり、後者の「道」は「さしづ」を聞き分け、それに基づいて「さしづ」通りに歩みを進めることである。

人間がそれぞれの思うように進む「道」は様々あるが、それはどれも「危なき」と言われる。それに対して、「ほんに成程たゞ一つの心」、すなわち、神の「さしづ」を心に治め、それを頼りに歩みを進めるよう説かれている(明治25年4月28日参照)。

「これまでの道を忘れぬよう」

そうした「道」をこれから通るために、これまでの「道」を思うようにと促される。

「古き事情、だんへようへの道を伝え、もうこれ五箇年という。一つの理に移り掛け。五箇年以前身は迫り、目は見えず、耳は聞こえず。余儀無く事情によって、五年以前の道、難しかったであろう。だんだん案ぜた道、ようへ一寸の道、これからどういう事始める。一年の後というは、一寸の理は見え掛けた。どうもならん。五箇年という一つの理、年が明ける。だんへの事情も定め掛ける。」(明治24年2月20日)

これは教祖5年祭を目前にしての伺いであるが、立教以来、神の教えに付き従ってきた歩みを「道」という言葉で表されている。そこには、難しい中も通り越えてきたということが含意されている。特にここでは、飯降伊蔵が本席と定まる頃、あるいはそれ以前は、「難しかった」「案ぜた」が、その後、教会が認可されるなど少し見通しが明るくなってきたことを言われている。

「艱難の道も忘れてはどうもならん。世上明るい道でも何時暗がりとも分からん。これまでの道を忘れぬよう。忘れさせにやようへの道は許してある。神一条より外の道は通れようまい。」(明治24年7月23日)

しかし、表の「道」が明るいように見えていても、これまで艱難の中も神が連れて通ってきた「道」を忘れないように説かれる。その「道」は、端的には教祖のひながたの「道」を指している。「刻限事情を以て話し掛ける。分からん事は尋ねるよう。皆それへ存命中の心で通れば、それだけの道を見せよう。」(前掲、明治24年2月20日)と言われ、教祖の通られた「道」を思い、刻限の「さしづ」に心を寄せて通れば相応の守護をすと論じられる。そして、「これからは大手行き抜けの道」(明治25年1月12日)に向って「長くの道」(明治25年6月15日)を、先々を楽しみに歩むよう求められている。

ここでの「道」は、第一義的には、当時の教会本部あるいは本教を一つの単位として説かれている。そこでは、一方で、歩むべき方向について空間的な意味で「道」という言葉で説かれるとともに、他方では、これからの歩を進める際の心の置き所について、時間的な意味で「道」という言葉を用いて説かれている。今回取りあげた本席身上伺いの「おさしづ」を通して、これまでの「道」、教祖ひながたの「道」を忘れぬよう、歩むべき「道」が論じられている。